

ヴァーツラフ・ハヴェルへのオマージュ
「代表者会議 *Konference*」は私たちに何を問いかけるか

What Kind of Questions Are Asked by the Drama “Conference *Konference*”
That Is Homage Paid to Václav Havel?

野 田 伊津子*

Itsuko NODA

Keywords

- ①カレル大学
- ②サマースクール
- ③ヴァーツラフ・ハヴェル人権賞
- ④ボフダルカ

Abstract

The 61st session of the Summer School of Slavonic Studies held in 2017 in Charles University, Prague, prompts participants to vividly imagine the situation of Václav Havel creating his works under the dictatorship of the Communist Party by showing a drama entitled “Conference *Konference*,” paying homage to Havel, and produced by the students of Charles University. The drama also reminds attendants of the era’s garce; today, most of us are living without the suppression of free speech.

* 金城学院大学キリスト教文化研究所客員研究員

I. はじめに

2017年7月28日より8月25日にかけて、第61回スラブ語研究のための夏期学校がカレル大学（プラハ市）にて開催された。著者は日本より五名まで授与される奨学金をチェコ政府よりいただいて、学びに参加することになった。この夏期学校（以下、サマースクール）は、学生、専門家（教師、翻訳家、通訳）およびチェコ関係の研究者向けのものだが、チェコの言語、文学、歴史、文化等に関心のある方々も広く参加することが許されている。奨学金の対象となるサマースクールが行われる各機関は、カレル大学（プラハ）、パラツキー大学（オロモウツ）、マサリク大学（ブルノ）である。著者は直近六年間に渡ってヴァーツラフ・ハヴェルによる演劇を研究し続けていたため、演劇研究所、ヴァーツラフ・ハヴェル図書館、クレメンティヌム図書館（いずれもプラハ市）が徒歩圏内にあるということでカレル大学を希望し、受け入れていただいた。

世界37カ国から総勢137名が参加した。学生だけでなく、職業を持ちながら夏期長期休暇を利用して参加した人も多かったようである。本国では教員をしているという学生が目立った。

専門家によるチェコ語学講義はもとより、カレル大学の音声学教員による細やかな個別レッスン、最新のチェコ語コーパスを用いたワークショップ、専門家を招聘しての特別講義の数々など、報告すべきことは数多くあるが、とりわけカレル大学哲学部にある外国人向けチェコ語部門で学ぶ学生たちによる戯曲「代表者会議 *Konference*」を観劇することによって、現実性を鑑賞する機会に恵まれたことは特筆に値する。今回は戯曲「代表者会議 *Konference*」にしぼって紹介し、簡潔な説明を加えることで報告とさせていただきます。

II. 戯曲「代表者会議 *Konference*」

戯曲「代表者会議 *Konference*」は、ハヴェル演劇へのオマージュとして

ヴァーツラフ・ハヴェルへのオマージュ 「代表者会議 *Konference*」は私たちに何を問いかけるか
企図され、カレル大学哲学部にある外国人向けチェコ語部門で学ぶ学生たちによるパフォーマンスとして、サマースクールが提供してくださった。ハヴェルが残したテキスト複数、主に戯曲「オーディエンス *Audience*」および研究「ジョークの解剖学 *Anatomie gagu*」, 加えてその他の著述家たちの引用からコラージュして制作されており、戯曲にしては珍しく、口語ではなく極めて文語調である。プラハ市内にあるクラブハウスで8月17日に上演された。サマースクールの学生に対しては、予習のため、事前に原文チェコ語だけでなく英訳テキストも配布された。

登場人物は、とある科学委員会を構成する六人のメンバー、プレシュ（科学委員会議長）、フェルディナンド・ヴァニェック（作家）、女性同僚1（男たらし スラートコヴァー）、女性同僚2（「ブルヴァール紙」読者 ベテルコヴァー）、女性同僚3（ゴシップを言いふらす人 マジャンコヴァー）、女性同僚4（悲観論者 フラヴァター）である。括弧内の説明は原文から筆者が直訳したものだが、形容が直裁すぎて、学生の中には原文テキストを見た段階で笑ってしまった人もいたのではないだろうか。

おおよその筋は、ユーモア研究のためのセンターによって組織された或る学術会議で、六人の科学者たちが一堂に会する。学術会議の目的は、冗談とジョークの本質を調査するためであった。会議を通して、科学者たちは飛び抜けて素晴らしい理論的な仕事を見せつけ、かなりの文語調で話す。一方で休憩時間には、彼らの表現は、かなり懐疑的で、不器用で、滑稽になっていく。

旧チェコスロヴァキア時代から知られた女優イジハ・ボフダロヴァー、通称ボフダルカが共通の話題として出てきて、彼女を軸に話が展開する。ボフダルカは現在では八十半ばであるにもかかわらず、戯曲中では若い時代に女性としての魅力が強かったことを中心に持ち出される。上演時間は約二十分ほどである。

筆者にとって驚いたことは、戯曲テキストだけを追いかけていたときは気づかなかったことだが、ハヴェルが自作を発表していたのは、酒、煙草、喧噪が溢れる、良く言えば活気のある、悪く言えば世俗的な世界であったことだ。上演後、出演者に対して、観客が質問をする時間があった。出演者も酒を飲みながら答え、観客の幾人かも、事前に注文したアルコールを飲んでいて、質問の内容も興味があったが、そこで展開されているアルコールを介した観客と出演者の交流は、そのままハヴェルが自作を発表し、反応を直接に確かめていた時代を理解させてくれるに十分なものだった。

Ⅲ. 一回性の生を意識して

報告を書こうとしたとき、はからずもヴァーツラフ・ハヴェル人権賞の受賞者の名誉へ寄せて、「私たちは、どれだけの代償を人権に対して喜んで支払うか *Jakou cenu jsme ochotni platit za lidská práva?*」という会議が10月、プラハにある聖アンナ教会で開催されるお知らせが入ってきた。筆者は、ハヴェルのことを全く違う方向から見ていたことに気づかせられる。二十年以上、抑圧的な共産主義一党独裁に対峙していた反体制作家は、修道僧のような禁欲的な生活をしていただけではない。むしろ一般人から見れば、人々の喜怒哀楽と必要以上にも密着して、人の洩らす本音をすくいあげて創作に励んでいたのである。そして、その一見すると世俗の中に埋没しきったように見える生活の中で、不当に逮捕された若いミュージシャンのために署名運動をしたり、同じく不当逮捕された作家たちを擁護したり、自身が逮捕されて裁判にかけられたり、獄中から哲学的な手紙を書いたりしていたのである。

劇場すなわち芝居小屋は、江戸時代の日本では悪所と言われて忌避されていた一面がある。確かに遊蕩と隣り合わせの場所には違いあるまい。しかし、矛盾しきった事実ではあるけれど、人々の清濁をあまり厳格に区別しない場所が、抑圧的な独裁体制下にあっても、今日の民主主義社会にあっ

ヴァーツラフ・ハヴェルへのオマージュ 「代表者会議 *Konference*」は私たちに何を問いかけるか
て当然で自然ではあるが、独裁体制下では許されなかった自由な考えを創生する孵卵器となっていたようである。

Ⅳ. キリストによる介入とともに —— カイロスとの邂逅

サマースクールで学んだことは、新しい知識を得ることは勿論、むしろ何が足りないか、何を学ぶべきか、出発点を与えていただくこととなった。同時に、世界中から集まった多様な背景を持つ学生たちと学ぶことは、当然に注意を要することもある一方、一ヶ月という限られた期間だったためもあるだろうけれど、皆が違うことを前提にお互いを尊重して、非常に寛容な世界であった。

今でも覚えているのが、学校企画の週末日帰り遠足へ行った帰り、バスの中は、ほとんどの学生が寝てしまうか、静かに外を見ていた。まだ体力が余っていた私は近くにいた日本人学生同士で、日本語で、小さな声で雑談をしていた。ある単語を日本語で言うのを躊躇して取えてフランス語で言ったとき、相手の日本人学生が「しー。聞こえますよ。」と止めてくれた。確かに日本語を理解する学生は少ないけれど、フランス語を理解できる学生はたくさんいる。聞かれて困る話ではないけれど、関係ない話に不要な関心をひくのが得策でないことはお互いが理解していたので、感謝して日本語で言い直した。言い直して気がついたことは、もし今の日本で正々堂々と話して良いこと、例えば人権、世界平和、「神の愛」すなわち福音について、多数が理解できる英語では話せなくなったらどうなるだろうかと言うことである。考えてみれば、わずか数十年前まで、富国強兵に突進する日本では人権、世界平和、「神の愛」すなわち福音について、公に話せないことは数多くあった。富国を目指すこと自体は素晴らしいことだが、現代、もし多数が理解できる英語では人権、世界平和、「神の愛」すなわち福音について話せないという事態が出来たとしたら、嫌だし困る。そして、もしも多数が理解できる英語で話せない時は、チェコ語のような少数

言語が役立つのではないかと考えてみる。事実、オーストリア帝国の支配下にあった時代、現在のチェコ共和国に当たる地域に住んでいた民衆は、当時は公用語ではなかったチェコ語で上演される人形劇を通して支配者を風刺した歴史がある。歴史は繰り返すと言う。最近、中国が英国の研究機関に対して、天安門事件など一定のトピックに関する論文を中国からは閲覧できないように要請し、英国の研究機関が受け入れたことを知り、歴史は繰り返すという格言に、ますます奇妙な現実味を感じている。

均質であることは強さでもあり、脆さにもなりうる。もし世界に一つしか言語がなかったら、案外、人は今より不寛容になってしまうのではないか。聖書には、人々が皆、同じ言語を話していた時代に起こったことが記されている。

全地は同じ発音、同じ言葉であった。時に人々は東に移り、シナルの地に平野を得て、そこに住んだ。彼らは互に言った、「さあ、れんがを造って、よく焼こう」。こうして彼らは石の代わりに、れんがを得、しっくい代わりに、アスファルトを得た。彼らはまた言った、「さあ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。そしてわれわれは名を上げて、全地のおもてに散るのを免れよう」。時に主は下って、人の子たちの建てる町と塔とを見て、言われた、「民は一つで、みな同じ言葉である。彼らはすでにこの事をしはじめた。彼らがしようとする事は、もはや何事もとどめ得ないであろう。さあ、われわれは下って行って、そこで彼らの言葉を乱し、互に言葉が通じないようにしよう」。こうして主が彼らをそこから全地のおもてに散らされたので、彼らは町を建てるのをやめた。これによってその町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を乱されたからである。主はそこから彼らを全地のおもてに散らされた。

『聖書 口語訳』「創世記」11章1-9節

神は人のすることを理由なく妨害するために言葉を通じないようになさったのだろうか。「彼らがしようとする事は、もはや何事もとどめ得ないであろう。」(6節)と言う部分に鍵があるのではないか。「何事も」とあるからには、善事だけではなく、悪事も含めて、何事をもとどめ得ないのである。そして、何事をもとどめ得ないという強さは、神によって言語を通じないようにされて雲散霧消してしまった。患者に対してドクター・ストップをかけるかのように、神は人のすることに制限を設けられたように思われてならない。現在、英語は世界共通語に等しい地位に近づきつつある。私たちは英語という言語を用いて神が喜ばれることに邁進しているだろうか。それともドクター・ストップがかかるようなことに血道をあげてはいないだろうか。ある日、突然ではなくても、英語で人権、世界平和、「神の愛」すなわち福音について話せない時代が来ては困るのである。チェコ語のような少数言語でのみ自由に意見を表すことが許されて、チェコ語を解する人の中だけから、わずかな理解者を求めなければいけない世界は、想像するだけで孤独が迫ってくる。チェコ語はあくまでも単なる一言語として学ぶ対象であってほしい。興味深く研究する対象であってほしい。もしもチェコ語学習が生き残りの手段になってしまったら、学ぶ楽しみが損なわれてしまうのは否定できない。

現在の世界、現在の日本は、歴史的に多くの人々の犠牲のもとに築かれている。当然すぎて誰もが滅多に確認しなくなっているけれど、人権、世界平和、「神の愛」すなわち福音について、自由に語ることのできる日本は、先達が払った莫大な犠牲のお蔭で存在している。ある日、突然、自由な世界は一幕劇でした、次の場面に移ります、と言って、全ての背景が書き換えられるということがあってはならない。莫大な犠牲の上に築かれた現代日本の自由は、あたかも演劇における書き割りのように、皆が合意して守

らなければ簡単に崩れてしまう脆いものなのだということは、もっと覚えておいた方がよい。先達が払った犠牲があまりにも大きかった歴史背景があり、その上、法律家たちを筆頭に大道具があまりに仕事上手なので、書き割りの脆さを忘れていても生活できてしまう日本が大好きではあるけれど。

V. はなむけとして

サマースクールが終わり、学生たちは各々の場所へ去っていった。短い期間ではあっても、あたかも一旦は神によって世界中に散らされた人々がチェコ語を共通項にして再び集められたかのような一ヶ月であった。無数の言語が飛び交っていたが、チェコ語という共通の話題と目的が常にあった。普段は接する機会がない思想、宗教、社会的、政治的な多様性のある背景を持つ他者とともにいても、罪のない共通の話題と目的が常にあれば、どれだけ安心できるか、身をもって経験できた。

愛がなければ、どのような思想も宗教も心に響かないのは聖書も語る自明のことであるのに（「コリント人への第一の手紙」13章）、人が神よりも大切なものがあつて的外れであるときは、神を信じていても、大事なことを忘れてしまっている。若い日に自分が的外れであることに気づかされて、罪からの救い主としてキリストを受け入れたことは、大変な十字架を背負う面が無かったと言えば嘘になるけれど、神の愛の大きさと自分との距離を知るにつれて、キリストを受け入れたことは間違いではなかったと気づく今日この頃である（「伝道の書」12章1節）。

旅立ちにあたっては、お互いに祝福を祈って別れた。行き先に難しいことがある学友もいれば、さらに自由を謳歌する学友もいる。机を並べた一人一人に神による守りと祝福を祈り、はなむけとして本稿を捧げたい。

ヴァーツラフ・ハヴェルへのオマージュ 「代表者会議 *Konference*」は私たちに何を問いかけるか

「代表者会議 *Konference*」 戯曲データ

出演者：キャムラン・バギロフ、カタリナ・イロヴィツ、アレクセイ・カスペロフ、アナスタシア・ミツル、オルガ・プリヴェゼンツェヴァ、マリア・ヴォヴチュク

脚本監督：イロナ・スタリー・コジャーノヴァー、マルティナ・クラートカー

音声学指導：イトカ・ヴェロニコヴァ博士

製作：マギエ・ヒルスフ



「代表者会議 *Konference*」 上演を知らせるポスター

<http://klubovna.povalec.cz/4462/program/konference-17-08-2017-20-00> (2017年11月30日アクセス)

謝辞

本稿は、カレル大学（プラハ）で開催された第61回スラブ語研究のための夏期学校Letní škola slovanských studií (LŠSS)に関する報告です。この場をお借りして、奨学金を授与していただきましたチェコ政府にあらためて感謝を申し上げます。